

## ■今月の特選句

2023年11月



## 神様は軽トラに乗り秋祭

長井多可志

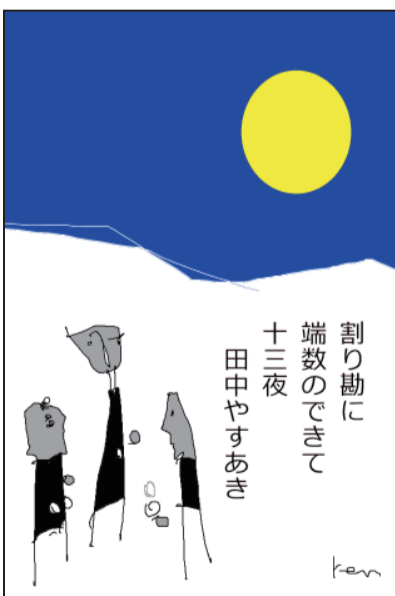
宮出しをされたご神体は、朝方、神輿に載せて担がれて、夕方には宮入となる。神輿の担ぎ手がなくなって軽トラになった現代の滑稽が描かれた。



## 天の川死は平等に訪れる

田中 勇

天の川を見て宇宙の広がりと時の悠久を思う時、万物の無常を感じる。人生は人それぞれだが、もれなく訪れる死の平等を実感するのだ。



## 割り勘に端数のできて十三夜

田中やすあき

さて、店を出ようと幹事さんが会計を計算すると端数が出た。よし、もう一軒行って、そこで割り切ろう。それでもだめならもう一軒行くさ。

## ■今月の特選句

2023年11月



## まるごとの栗が嬉しい栗ご飯

岡田廣江

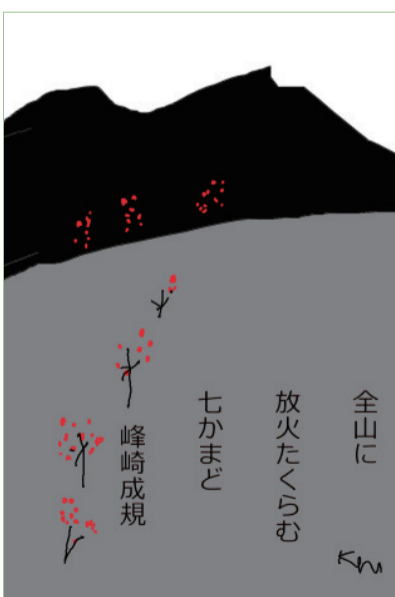
嬉しさを素直に描いたのがよろしい。家庭によって、丸ごとなのか小さく切るのか作り方もいろいろだが、栗の大きさや秋の豊かさが表現された。



## 秋の浜誰にも見せぬ膝小僧

谷本 宴

夏の水着では隠しようもないが、秋の浜辺ではスカートの裾を少し持ち上げて歩いてみた。誰に見せることも見られることもない秋の海である。



## 全山に放火たくらむ七かまど

峰崎成規

ナナカマドの赤が飛び火すれば大変なことになる。それほどに実の赤色は火力が強い。あの色は全山に放火を企んでみるとみて間違いないだろう。

## ■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

脇役のやうやく出番秋刀魚焼く ・・・この頃お値段主役級なり	白井道義
満月や大風呂敷に包みたし ・・・保管しておく小屋も造らむ	和田のり子
虫時雨お国訛りの隔てなく ・・・虫にはあらず標準語など	月城花風
指揮棒の風振りやまず猫じゃらし ・・・統率力はカラヤン顔負け	井口夏子
膝頭秋の終わりと洗いけり ・・・綺麗な膝は炬燵に入れむ	久我正明
読みもせぬ本にはさみし散紅葉 ・・・俳諧にある侘び寂び「栞」	加藤潤子
屋上に車止めればアキアカネ ・・・俳句に詠んでもらいたかつたか	山本 賜
手の届くところに空や曼珠沙華 ・・・突然空から降つたかに咲き	相原共良
卒塔婆のやや傾きて小春の日 ・・・これ見て婆が卒倒したとか	遠藤真太郎
台風の袋叩きに遭ふ花壇 吉川正紀子 ・・・造つてやりたい鉄製の蓋	川正紀子
溺るるも良しコスモスの海ならば 西野周次 ・・・溺れる前に香りに酔ひたし	西野周次
目を凝らすほど見損じる流れ星 山内 更 ・・・凝視するなど目を懲らしめる	山内 更
愛でられる新米を妬く古米かな 横山洋子 ・・・そんな古米は焼餅にせむ	横山洋子

## ■今月の滑稽句

\* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

峠田のバツタが跳ねる又はねる	相原共良
ちちろ虫だろか磐座の深きとこ	相原共良
安らかに眠れぬ銅像南洲忌	青木輝子
松茸は見るもの香ぐもの年金者	青木輝子
賞罰のない道歩み文化の日	青木輝子
虫の音をたらふく食へど味のなし	赤瀬川至安
秋のシロ小町通りに憚りぬ	赤瀬川至安
茶立虫リズムはアート・ブレイキー	赤瀬川至安
首ひと廻り運動会のリレー追ふ	井口夏子
虎柄の俺は王者と鬼やんま	井口夏子
ラグビー決戦さまようボールは何処にいる	池田亮二
翁にも媼にもなれず敬老日	池田亮二
秋の蚊を打って手のひら痛くなり	石塚柚彩
芋の露ゆらゆら今にも落ちさうな	石塚柚彩
羽音強く鴉の威嚇秋の朝	石塚柚彩
秋めくは立冬ころと云ふ予報	伊藤浩睦
放生会放つなそれは外来種	伊藤浩睦
午前四時三回目なる夜食かな	伊藤浩睦
今宵の流星待ち侘びて寝不足に	稲葉純子
しあはせふしあはせ背中合はせの秋の風	稲葉純子
長き夜やふたりの電話きりもなし	稲葉純子
貸した本水羊羹と返りけり	井野ひろみ
名月や人の住む日もありさうな	井野ひろみ
奪衣婆(だつえば)に持たせてみたき曼珠沙華	井野ひろみ
名月に覗かれている露天風呂	上山美穂
手首足首寝床に引っ込む秋の朝	上山美穂
タクシーの車庫のつばくろ帰りけり	上山美穂
ランプの宿にランプを灯し暮の秋	卯之町空
みちのくの琥珀の森に水澄めり	卯之町空
願ひ事言ふ間もなく流れ星	梅野光子
赤とんぼ群れ飛ぶ下を子ら帰る	梅野光子
柚子餅をつまみ月観る夜もすがら	梅野光子
高血圧で始まり終わる神の旅	遠藤真太郎
農協の古希は若手よ山牛蒡	遠藤真太郎
翳雲公衆電話立往生	大林和代
赤赤赤赤わたし曼珠沙華	大林和代
十月の値上げ特売赤文字で	大林和代
はじけ飛び笑顔あふれる栗拾ふ	小笠原満喜恵
迷ひ道幽霊花に誘はれて	小笠原満喜恵
線路道消えてつまらん虫の音も	小笠原満喜恵

葡萄の房を歯抜けにしたは家の虫	岡田廣江
老ばかり四年ぶりなる秋祭	岡田廣江
大根擦る辛くするため腹立てて	加藤潤子
明治天皇と祖父が生まれた文化の日	加藤潤子
追われたか息を切らして赤蜻蛉	門屋 定
秋彼岸何時も利息は五円なり	門屋 定
辞書を見て弱いとつけて鯛かな	門屋 定
鬼嫁や竜淵に潜む台所	北熊紀生
別れ鳥十年経ちても「金送れ」	北熊紀生
秘書付の避暑を楽しむ社長かな	北熊紀生
サルスベリ倚りてコケてる赤ら顔	木村 浩
炎天下花群生のサルスベリ	木村 浩
秋の風どこに行こうか旅心	金城正則
七十二お腹まるまる狸腹	金城正則
トベZOOのピースぐったり炎昼の	金城正則
増えるものうっかりミスと日永かな	久我正明
ロボットの首は長々曼珠沙華	久我正明
穴まどひ野面積みなる石垣の	工藤泰子
熊注意落石注意の札の径	工藤泰子
今生の水の惑星虫浄土	工藤泰子
添え木なく猶のぶ妣の紫苑哉	くるまや松五郎
迷い込む路地の千鳥足に良夜	くるまや松五郎
立待の月は煌々幟立つ	くるまや松五郎
風の来て稲穂と甘蕉(ばなな)の葉を揺らす	桑田愛子
蟪蛄の腰の細きに秋日射す	桑田愛子
作るより買うのが速し秋の卓	桑田愛子
オートバイ法衣なびかせ盆僧来	壽命秀次
眠る子の握つて放さぬ猫じゃらし	壽命秀次
ハロウインの犇めく夜の化粧室	壽命秀次
休肝日先に延ばして敬老日	白井道義
さはやかに握手交わして失恋す	白井道義
段畑の石積み囲う曼珠沙華	鈴鹿洋子
金杯の透ける鶴亀菊の酒	鈴鹿洋子
一生を家庭に捧げ零余子飯	鈴鹿洋子
一匹の蚊捉えるまで仲良し夫婦	鈴木和枝
私から離れて鼻歌の夫	鈴木和枝
急ぐ雲を止めない忘れ物したのだ	鈴木和枝
秋分や弥次郎兵衛喜多八の段を聴く	高須賀溪山
秋風の吹けばワクチン七回目	高須賀溪山
名月にうさぎが薬造るとか	高須賀溪山

筋通す頑固が取得敬老日	高田敏男
あれあれで話通じる敬老日	高田敏男
身勝手に痛いところ無し敬老日	高田敏男
虫の音やいつの間にやら鳴き競ふ	田中 勇
木犀の咲いたと知るや香りから	田中 勇
山霧の流れに消ゆる伊賀の者	田中やすあき
暗闇のカーテンコール虫の秋	田中やすあき
カーナビに文句言われて秋の旅	谷本 宴
しやらくせ一台風なんぞおととい来い	谷本 宴
爽やかに白髪気になる日差しかな	月城花風
懼るるに足らぬ大盛り天高し	月城花風
思い出のはばかり守る金木犀	土屋泰山
御御付身にしむ朝餉パン二枚	土屋泰山
十六夜やライン送信まだ押せぬ	土屋泰山
海のある故郷にはなき林檎園	長井多可志
穴まどひ呼び止めてみても何だし	長井多可志
障子洗ふ破つた孫に手伝はせ	長井知則
孫も嗅ぐ新米五合の湯気の香を	長井知則
街路樹は雀の学校秋の暮	長井知則
櫃原の鳥居くぐれば天高し	永易しのぶ
お揃いの湯呑みをおろす夜長かな	永易しのぶ
すすき道振り向き私を探す君	永易しのぶ
目もくれずすたこらさつさ油虫	西野周次
飛蝗跳ぶ牛若丸のさながらに	西野周次
翳雲前に倣えはちょっと下手	花岡直樹
過疎の村案山子数えて千に乗る	花岡直樹
秋遍路宿ではビールぐびり飲む	花岡直樹
ふくよかな尻秋茄子とわたくしも	浜田イツミ
新米や百日延びて欲し寿命	浜田イツミ
敬老会ぼけない音頭を歌はされ	浜田イツミ
足弱を元気づけたる案山子かな	久松久子
合の手は木魚に入れて小鳥くる	久松久子
磔の蝟大空を泳がされ	久松久子
赤色と青色と買ひ林檎かな	日根野聖子
脚力も羽根も自慢の飛蝗とぶ	日根野聖子
愛されぬこと哀しまず毒きのこ	日根野聖子
生身魂語る人生裏表	藤森荘吉
月一度焼肉食べる生身魂	藤森荘吉
とはいへど生きているから生身魂	藤森荘吉

秋めくと暦ばかりが先走り	細川岩男
九月末そわそわ仕出す山野かな	細川岩男
うすら寒やおら来ましたこの季節	細川岩男
八朔や庭の草にも小さき風	ほりもとちか
止める者なき戦なり虫しぐれ	ほりもとちか
野分雲風の又三郎乗せて	ほりもとちか
点眼の瞼の裏にスツと秋	南とんぼ
猫を眠らせきれ一いに食ぶ秋刀魚	南とんぼ
酸っぱさも又良し君へ青みかん	南とんぼ
ぎんなん踏む二足歩行の覚束無	峰崎成規
軽トラはおらが自転車豊の秋	峰崎成規
赤ポスト小首傾げる赤蜻蛉	明神正道
紅葉葉にベンチ取られて家路かな	明神正道
シニアの日！「明日のプールは休みです」	明神正道
鳩を吹くほら吹きぢぢと言はれよが	椋本望生
赤子の放屁コスモス色の力	椋本望生
腕振れば踵の上がり今朝の秋	椋本望生
遠花火思ひの丈は闇に咲く	村松道夫
汚染水放水の愚や鱗雲	村松道夫
なれの果て栄華は遠く破蓮	村松道夫
やつと来てくれて咲いたね曼珠沙華	森岡香代子
名月やひこうき雲をしたがえて	森岡香代子
あさき夢見つつ果てるや虫の声	森岡香代子
猪が荒らしたらしい畑の穴	八木 健
昨日今日膝から下がそぞろ寒	八木 健
ちやつかりの草の実ズボンの裾につく	八木 健
大きめに運動会の塩むすび	八塚一青
またしても引き立て役の檸檬かな	八塚一青
オープンで焼かれてもなほ笑い栗	八塚一青
秋の蚊の聴覚試す計らひも	柳 紅生
毒舌の毒見役なり生身魂	柳 紅生
邪鬼のごと踏みにじられて栗のイガ	柳 紅生
夏惜しむ今年は御免蒙るよ	柳村光寛
両隣ばかり釣れるよ紅葉鯛	柳村光寛
高く低く思い思いに秋茜	柳村光寛
奮発の二階A席九月場所	山内 更
ハロウィン魔女もかぼちゃも踊りだす	山岡純子
月光を食べて生きてるウサギかな	山岡純子
月天心骨折の我照らしけり	山岡純子

秋されば猫も人恋しくなりぬ

山下正純

秋来ぬと人みな風に教わりぬ

山下正純

風に恋する秋来ぬや秋来ぬや

山下正純

セ氏三十五度以上の日と言う猛暑日と

山本 賜

いっしんにうるめ鯛をあぶりけり

山本 賜

高価すぎ秋刀魚の目玉うるみけり

横山洋子

日常をひっくり返すや秋祭

横山洋子

下草の刈り跡にすぐ曼珠沙華

吉川正紀子

ショットバーボジョレヌーボの赤を詠み

吉川正紀子

天高くTシャツアートの浜いっぱい

渡部美香

香りもて人ふり向かす青蜜柑

渡部美香

あったあったWEB美術展の声高に

渡部美香

酷暑なりシークワサーの一气飲み

和田のり子

行き合うて又行き逢うて空の秋

和田のり子